

和名類聚抄寶生院本、人倫部男女類の條に、後漢書注云、髻髮上音迢、字亦作髻、和名、謂童子垂髮也、按宇奈井放とも、省きて宇奈井とのみもいへるなり、髻髮の字面はよく叶へりともおぼえず、

同業○萬集十四卷丁廿五右、相聞往來歌に、多知婆奈乃古婆乃波奈里我○中略、按○中略、波奈里は例の童女

非なり、そも、宇奈爲は、女兒八歳を過れば、童髮を内外に分て、内の毛を項につかねゆひ、外廻の毛をば、たれさげ放毛にし、肩の邊より少しさげて、切そるへたるを、宇奈爲波奈利といひ、

省ては宇奈爲とのみもいへり、これ女兒の稱にて、男兒にはいへる例なし、然て十四歳よりは、放ハナリの髮を舉て結び、女姿になる事也、男兒は二八十六歳にして陽道通すれば、冠して男姿にな

り、女兒は二七十四歳にして陰道通すれば、結髮して女姿になる事なれど、中には早晚ありて、必この定にもあらず、宇奈は宇奈自ウナジを省たる語にて、頭の後をいふ、新撰字鏡四丁、肉部に、脛大

候反、去、項カシラ、ウシロ、ノマク、ラス、ト、ロ、ナリ、項也、宇奈己夫、又宇奈自云々、項衝は頭後の寫誤なり、宇奈己夫は枕骨也、和名抄三卷、頭面類部に、陸詞切韻云、項胡講反、頸後也、公羊傳注云、齊人項謂之脛、田候反、和名宇奈之

云々など見ゆ、祝詞祝詞考上卷、十九丁右、廿三丁左、四十四丁左、に、宇事物頸根衝拔とあるは、首根にて、俗にいふボンノクド也、鵜の水に潜如く、頭を倒にして平伏する貌也、八千矛神の御歌古事記上卷、一丁左、に、宇那加

夫斯とあるは、項傾ウナカフシにて、項を傾垂て泣貌をいへる也、續世繼三卷、十丁左、ゆみのねに、人のいたく烏帽子の尻高ウツあげたるに、うなじのくぼに結ていでんと思ふ也、云々、源平盛衰記十三卷、十丁左、熊

野新宮軍事に、烏帽子ノ尻盆ノ窪ニ押入テ云々、長門本平家物語八卷、高倉宮御事に、まぼしぼんのくぼに押入て云々、三議一統上卷、廿丁左、法量門に、大くび先を、後のぼんのくびにあつるやうに

あて、腰を引まはし云々、此等のうなじのくぼ、盆の窪などみな、今俗に云ボンノクド也、

〔新撰字鏡〕髻、髻、髻
同哉、從反、上、角、艸、束髮、阿介、万支、